

ローマ人への手紙 16章の宛て先はどこか

橋 耕太
TACHIBANA Kota

はじめに

「ローマ人への手紙」は、われわれが手にすることのできる、パウロによって書かれたとされる手紙のなかで最長の手紙であり、また多くの場合、最後に書かれた手紙とされる。その真筆性について疑いの目が向けられることは現在、ほとんどもしくはまったくない。しかしながら、この手紙の最後の部分については、ほかの部分との統一性に関して、多くの議論を呼び起こしてきた¹⁾。そのなかで導出されたのが、現存するローマ書の最後の章である16章は、ローマにではなく、エフェソに宛てて書かれたものであるとする、いわゆる「エフェソ仮説」である。

本論文は、エフェソ仮説における論点を整理しそれらを検証することで、ローマ書16章がそのはじめから、1-15章とひとまとめにローマに宛てて書かれたものであることを確認することを目的とする。

なお、ローマ書16章の24節は本文批評上の外的証拠により、25-27節の「頌栄」部分は内的証拠においてそれぞれ、パウロの手によるものではなく後代の加筆によるものであることが広く認められており、本論文もその判断に従う²⁾。したがって、本論文で断りなく16章と記す場合は、1-23節のことを指す。

1. エフェソ仮説

エフェソ仮説は、J. S. Semlerが18世紀（1769年）に、ローマ書15-16章が1-14章とは別の、ローマではない宛て先を持つ手紙であると主張したのちに、D. Schluzが1829年に、16章はエフェソに宛てられた独立した手紙であると述べたことをその嚆矢とする³⁾。そのテーゼに対し、T. W. Mansonが修正を加えた。それは、もともとローマへと向けて書かれたものがローマ書1-15章であり、エフェソにそのコピーが送られる際に（パウロ自身によって）書き足されたエフェソ向けの挨拶文である16章が付け加えられたとするものである⁴⁾。エフェソ仮説は、いくつかのバージョンを持つものの、基本的にはMansonの仮説によって代表されている。この仮説はその後、とくに第二次大戦後の数十年にわたって多くの支持者を獲得したものの⁵⁾、現在では同意する研究者の数はあまり多くはない⁶⁾。しかしながら、近年でも依然としてエフェソ仮説を支持する研究者は存在している⁷⁾。そのためエフェソ仮説について論じることは、いまだに一定の意義を持つものとみなすことができるであろう。

上述の通り、エフェソ仮説は、一時期相当数の研究者の支持を集め、それゆえにその主張の根拠もまた、さまざまである。それでも、いくつかの主要な議論に絞ることは可能である。ここではそれらの論点を整理し、その分類にしたがってそれぞれに検討を加えていく。

主要な論点は以下の通りである⁸⁾。それらは、(1) ローマ書15章と16章が分割可能であること、(2) 16章はエフェソに宛てて書かれていること、すなわち内容がローマよりもエフェソにより適うこと、に大きく分けられる⁹⁾。これは同時に、形式的な議論と内容的な議論による分類でもある。

- (1) 15章と16章の分割可能性：統一性の問題
 - (a) 本文批評上の問題
 - (b) 手紙の結びの定型表現に関する問題
 - (c) 「独立した手紙」としての16章

(2) 16 章はエフェソ向け：宛て先の問題

- (a) 人名リストにおける多くの知己の存在
- (b) エフェソと結びつく人物の存在
- (c) 16:17-20 の「警告」

2. 15-16 章の統一性

エフェソ仮説が提出される第一の根拠として、ローマ書 15 章と 16 章の間の「切れ目」の存在が挙げられる。1-15 章と、(1-15 章に付加される形であれ、独立した手紙という形であれ) 16 章が別々の宛て先を持つためには、その間に分割可能な「切れ目」があることを論証することが不可欠となる。ここでは、「切れ目」の根拠をふたつに分けて論じ、最後に 16 章が「独立した手紙」であるという仮説について検討を加える。

(1) 本文批評上の問題¹⁰⁾

ローマ書は、全体としていくつもの形において保存されており、写本が証言する異読のパターンは 14 種にもおよぶ。さらに、NA28 版が再構成する形 (1-15:33+16:1-23) は、現存する写本が証言しない形であるため、全てのパターンをあわせると 15 種となる¹¹⁾。主要な写本が示すパターンは以下の通りである¹²⁾。

- ① 1:1-14:23+15:1-16:24 : F G 629 Hier^{ms}
- ② 1:1-14:23 : マルキオン聖書
- ③ 1:1-16:23(24)+16:25-27 : \mathfrak{P}^{61} \aleph B C D 81 365 630 1739 2464 et al.
- ④ 1:1-15:33+16:25-27+16:1-23 : \mathfrak{P}^{46}
- ⑤ 1:1-14:23+16:25-27+15:1-16:24 : L Ψ 0209^{vid} 1175 1241 1505 1881 et al.
- ⑥ 1:1-14:23+16:25-27+15:1-16:23(24)+16:25-27 : A P 33 104 et al.

⑦ 1:1-14:23+16:25-27+15:1-15:33+16:25-27 : 1506

これらのうち、マルキオンの、もしくはマルキオン系のローマ書が14章で閉じられていたことは広く知られている。その編集が彼ないし彼らの神学に基づくものであったこともまた、認められているところである¹³⁾。しかしながら、本論文の関心は15章と16章、および両章の関係にあるため、ここでマルキオン聖書について検討を加えることはない。Mansonもまた、エフェソ仮説の前提として、1-15章がひとまとめであったことを認めている¹⁴⁾。このことはつまり、パウロ個人のそれまでの伝道活動とこれからの伝道計画を記している15:14-33が、本来のローマ書に含まれていたことを示しており、それがもともとローマという宛て先を持っていたことを、エフェソ仮説も認めていることになる。むしろそれゆえに、1-15章と16章が別々の宛て先を持っていたとするエフェソ仮説が想定可能となるのである。

写本の示すパターンはさまざまであるが、ローマ書15-16章の関係のみに着目すると、ふたつの重要な例外を除いて、ほぼすべての写本において15:33の直後に16章が続いていることに気がつく。15-16章をひとまとめとしない例外的な写本のひとつが、1506写本である。この写本は、「頌栄」を二度繰り返す、それで15:1-33をはさむ形をとっており(1-14:23+16:25-27+15:1-33+16:25-27)、一方で16:1-23(24)は完全に削除されている。しかしながら、この特徴的な写本は1320年のものとされ、また本文批評上も本来のテキストを反映しているとはみなされず、マルキオン型の影響下にあるものと判断されている¹⁵⁾。

ローマ書15-16章をひとまとめとしないもうひとつの例外的な写本が、 \mathfrak{P}^{46} 写本である。200年ころのものとされ、現存する最古のものであるこの新約聖書写本は、1-15:33+16:25-27+16:1-23という形をとる。この、15章と16章を「頌栄」によって分断する写本の発見と1935年における発表は、15章と16章の分割を想定するエフェソ仮説の重要な根拠とされた¹⁶⁾。Mansonによると、 \mathfrak{P}^{46} 写本の発展過程は、1-15:33 → 1-15:33+16:25-27 → 1-15:33+16:25-27+16:1-23となる。その想定によると(ローマに宛てられ

た) 本来のローマ書は 1-15:33 のみの形となり、 \mathfrak{P}^{46} 写本に 16 章全体が付加されたのは、後代のアレクサンドリア型写本の本文の影響である¹⁷⁾。しかしながら、この想定は K. Aland によって方法論上の不備を指摘されている。それによると、Manson はその発展過程において 1-15:33 と 1-15:33+16:25-27 という現存しない本文の形をふたつ想定する点、さらにはそれらを結びつけている点で実証が困難な想定を重ねており、それに対してはむしろ 1-16:23 に「頌栄」が結びついた形 (1-15:33+16:1-23+16:25-27) から「頌栄」の位置が移動した結果として、 \mathfrak{P}^{46} 写本 (1-15:33+16:25-27+16:1-23) を説明する方が、写本の発展の再構成に基づけば、より確からしい¹⁸⁾。エフェソ仮説は \mathfrak{P}^{46} 写本を使って、1-15 章のみの (ローマに宛てられた本来の) ローマ書の再構成を主張したものの、それは再構成された本文の発展形式にはそぐわないものであり、また、最古の写本とはいえ、たったひとつの写本を重要視するあまりにほかの写本を軽視することも、本文批評の方法論上、受け入れることはできない。結果として、ローマ書の本来の形は、1-15:33+16:1-23 であると判断されるべきであろう¹⁹⁾。これによって、15 章と 16 章の間に「切れ目」があることは、本文批評上は否定される。

(2) 結びの複数さ

本文批評上の、とくに \mathfrak{P}^{46} 写本に関する問題と並んで、ローマ書 15-16 章が分割可能であることの論拠となるのが、ローマ書の最後の部分 (15:33-16:23 [-27]) における結びの重複である。W. Marxsen が整理するように、ローマ書の最後の部分には通常は手紙の末尾に使われるような結びが複数あらわれ (15:33; 16:16, 20 [, 24, 25-27])²⁰⁾、それがいささか奇妙な印象を与えるのは確かである。エフェソ仮説は、そのなかでも 15:33 と 16:20 の結びの重複に着目し、15:33 がもともとのローマ書の結びであったこと、すなわち 1-15 章と 16 章それぞれが別々の手紙であった可能性を指摘する²¹⁾。しかしながら、その指摘は正しいものとはみなされない。同様の表現は、ローマ書内のほかの箇所にも散見され、それらは手紙の結びとしてではなく、新しい議論を提示する際の文句として使用されている (5:21; 15:13)。

また、15:33に見られるような「平和の祈念」や「神とともにいること」といった表現は、ほかのパウロによる手紙において、手紙の最後にではなく、むしろ手紙の結びの導入句としてあらわれる（2 コリ 13:11; フィリ 4:9; 1 テサ 5:23。2 テサ 3:16; ヘブ 13:20; 3 ヨハ 15 も参照²²⁾。すなわち、ローマ書 15:33 の文句は手紙の終わりではなく、それに続く文章を強く要請するものである²³⁾。他方で、16:1 の冒頭の $\delta\epsilon$ は、それに先行する文章があることを示唆している²⁴⁾。

これらの議論によって、手紙の結びの定型表現においてもまた、ローマ書 15 章と 16 章の間の「切れ目」の存在は実証されない。ただし、ここで示されたのは 15:33 が後続のテキストを、16:1 の小辞 $\delta\epsilon$ が先行するテキストをそれぞれ要請するものであるということであり、それぞれがまったく別のテキストと結びつけられていた可能性自体を否定するものではない。しかしながら、その可能性を想定することはかなり困難であろう。

(3) 「独立した手紙」としての 16 章

以上のふたつの議論によって、ローマ書 15 章と 16 章の間の「切れ目」の存在、つまり 15 章と 16 章がもともと別々の手紙に属していた可能性はすでに否定されたとみなし得る。ここではその検討の最後に、16 章が本来は「独立した手紙」であり、後代に 1-15 章に付加されたとする説について簡単に述べておきたい。この仮説は、現行のローマ書はローマに向けられた手紙のコピー（1-15 章）にエフェソ宛での 16 章が付加されたとする Manson 型と並んで、エフェソ仮説の主要なパターンである²⁵⁾。それが内包する論点は、基本的には Manson 型と同じであるが、それとは別に、そもそも古代の地中海世界において挨拶のみの手紙は存在するのか、という批判を受けている²⁶⁾。

その批判に対して、A. Deissmann と J. I. H. McDonald は、古代の地中海世界における挨拶のみの手紙の例を挙げる（BGU 601; P.Oxy 1962 など²⁷⁾。とくに P.Oxy 1962 は、McDonald によると、その内容の 63% を人名リストが占めており、それは人名リストが 64% を占めるローマ書 16:1-

23 と非常に近い割合を示す²⁸⁾。それと同時に両者は、16 章と同様の特徴を持つ古代の手紙にも言及している²⁹⁾。彼らの研究により、古代の地中海世界において挨拶のみの手紙が存在したことは認められるであろう。

しかしながら、挨拶のみの独立した手紙が同時代に存在していたことがそれすなわち、ローマ書 16 章が独立した手紙であることを証明はしない。パウロによる手紙には、挨拶のみの手紙の並行例は存在しない。また、エフェソに宛てられた独立した手紙である 16 章がどのような経緯をたどって、別の宛て先を持っていた手紙 (1-15 章) と結びつけられたのかを説明することは、はなはだ困難であると言わざるを得ない。パウロによる手紙において、別々の手紙がひとまとめにされる場合、それは同じ宛て先を持つもの同士が結合されている (第 2 コリント人への手紙、フィリピン人への手紙)³⁰⁾。

これらの理由により、ローマ書 16 章が「独立した手紙」であった可能性は否定されるであろう。しかしながら、Deissmann と McDonald の研究は、少なくとも機能的には、16 章が独立しているとみなし得ることを示している。

ここまで、エフェソ仮説をめぐる形式的な議論に的を絞り、とくにローマ書 15 章と 16 章の間の「切れ目」について論じてきた。その結果、本文批評上の「切れ目」は確認できず、1-16 章はそのはじめから、ひとまとまりであったとみなされる。しかしながら、この議論は当然、16 章がエフェソに向けられていることを論証するためのものではない。以下では、16 章の内容上の議論へと移る。そこでの問いは、16 章は一体どこに向けて書かれているのか、である。

3. 16 章の宛て先はどこか

先に論じてきたローマ書 16 章を中心とした形式的な議論は、16 章がエフェソに宛てられていること自体を検討するものではない。エフェソ仮説を支持する研究者たちは、形式的な問いを立てることで、本来のローマ書 (彼

らによれば、1-15章)がローマという特定の宛て先に向けられた手紙であると同時に、より一般的な性格を持つことを指摘する。すなわち、彼らにとってローマ書とは特定の地を超えた、より普遍的なテキストであり、それは(いくつかの形を持ち)いくつかの地に回覧された巡回型の手紙であった³¹⁾。そして、現行のローマ書は、そのなかのエフェソに向けて書かれたバージョンであると彼らは主張するのである。

ここからは、ローマ書16章の内容的な議論へと進む。エフェソ仮説は、16章の内容がローマよりもエフェソの状況に適合すると主張する。ここで問われるべきは、16章は内容上、どこの地域を指示しているのかである。すなわち、ローマなのか、エフェソなのか(それとも別のどこかなのか)。しかしながら、このような問いにもかかわらず、本論文は結果として、16章はその宛て先を同定する明らかな情報を持ち合わせてはいない、という結論に達することになる。

(1) 人名リスト

ローマ書16:3-15にあらわれる人名リストは、26の個人名と名前の明記されない2人(ルフォスの母、ネレウスの姉妹)の人物を含んでいる。このリストは、量(人数)および質(付記された情報)の双方の点において、ほかのパウロによる手紙に並行例を持たない。そこにはパウロの多くの知己が確認できる。そのような知己の多さは、パウロにとっていまだ訪れたことのないローマの共同体(1:10, 13; 15:22)におけるよりも、親交の深かったエフェソの共同体(二年間におよぶ滞在。使19:10)における方がより確からしいとエフェソ仮説は主張する³²⁾。たしかに、パウロと親交を持っていたということは、かつて東方に在住・滞在していたということであり、このリストに記される個々人全員がその後、ローマ書が執筆されるまでにローマへと移動したと想定するのは、いささか難しい。G. Bornkammによれば、それは「小さな民族移動」の様相を呈する³³⁾。

しかしながら、この人名リストに含まれる個々人は、その全員がパウロの知己であったわけではない。たしかに、名前に付記された情報からパウロの

知己であったと判断できる人物はいくつか存在する。それは、プリスカ、アクィラ、エパイネトス、アンドロニコス、ユニア³⁴⁾、アンブリアトス、ウルパノス、スタキユス、アペレス、ペルシス、ルフォス、ルフォスの母の 12 名である³⁵⁾。パウロは、このリストにおけるほかの 14 名については名前以外の情報を持ち合わせていない。最後の 2 節（ロマ 16:14-15）に記される 10 名は、ただ名前が羅列されるだけであり、彼らと同じ共同体に属するほかのメンバーの名前は記されていない。アリストブロスとナルキソスはキリスト者であるとは考えられず³⁶⁾、それゆえ彼らは共同体のメンバーではない。このことは、パウロとそれらの人々との関係性の薄さを暗示しており、このリストの宛て先に親交の深かったエフェソの共同体を想定するよりはむしろ、未知の共同体であるローマを想定する方がより好ましいかもしれない³⁷⁾。パウロが、リスト内に言及されている五つの小共同体³⁸⁾に関して、それらとの過去の体験や将来の見通しを一切記さないという点も、このリストが未知の共同体に向けられていたことを示唆する。また、新約聖書中にエフェソとの結びつきを示す人々の多くがこのリストに言及されないことも、このリストがエフェソに向けられたものではないことを補強するかもしれない³⁹⁾。以上の点に鑑みて、16:3-15 の人名リストがパウロと親密な関係にあった地域の共同体としてのエフェソに宛てられていたという可能性は、かなり低く見積もることができるであろう。

長年、ローマ訪問を切望していたパウロ（ロマ 15:23）は、プリスカ、アクィラといったローマとの結びつきを持つ友人たちを通して、彼らの情報を得ていたのかもしれない。未知の共同体に対してこのような長大なリストを送った理由については、これから先の関係性の構築のためであり、知己の名前を挙げるのはそれをスムーズに達成するためのものであるという想定がされている⁴⁰⁾。これはあくまで推測に過ぎないが、上述の通り、個人名を列挙したリストの並行例はパウロによるほかの手紙のなかには見出すことができず、もっとも近い例が、第二パウロ書簡群に位置づけられるコロサイ人への手紙（4:7 以下）であることは、非常に示唆的である⁴¹⁾。

以上のように、ローマ書 16:3-15 の人名リストを使って、16 章の宛て先

をエフェソに同定することは難しい。同時に、いくつかの根拠は提示されているものの、ローマが宛て先であると強く示す根拠が必ずしもあるわけではない。この議論はむしろ、開かれたままで残されるべきであろう。

(2) エフェソと結びつく人々

続いて主張されるのが、先と同じローマ書 16 章の人名リストにあらわれる、プリスカとアクィラ (3-4 節)、およびエパイネトス (5 節) に関するものである。この一組の夫婦と一人はそれぞれ、エフェソと強い関係性を持っている。

プリスカとアクィラは、このリストのなかでも最初に名前を挙げられており、協働者というタイトルを付記されている点からも、パウロが大きな信頼を与えていたことがわかる。もともとローマ在住であったプリスカとアクィラは、クラウディウス帝のユダヤ人追放令 (スエトニウス「クラウディウス」25) にともなってローマを離れ⁴²⁾、コリントへと移住し、そこでパウロと出会ったことが使徒行伝に記されている (18:2)。その後、パウロに同行する形でエフェソへと移動し、そこで伝道活動を行った (18:18, 26)。彼らはそこで自らを中心とする「家の教会」を組織したようである (1 コリ 16:19)。彼らの「家の教会」については、ローマ書 16 章でも言及されている (5 節)。彼らは第 1 コリント書の執筆時には、エフェソに滞在していた。彼らがパウロのために「自分たちの首を危険にさらした」(ロマ 16:4) のもまた、エフェソでの出来事であったと想定される (1 コリ 15:32 「野獣との闘い」; 2 コリ 1:8 「苦難」; 使 19:33-40 「アルテミス事変」)。

彼らに続くのが、エパイネトス (ロマ 16:5) である。われわれはこの箇所以外に彼に関する情報を持ち得ないが、ここで「アジアの初穂」と称されていることから、彼はパウロの伝道活動によってその地域ではじめて獲得された最初期キリスト教のメンバーであると思われる。また、アジアとはおそらくエフェソのことであり、エパイネトスの出身地ないし居住地を指し示している。彼がパウロと出会ったのもその地であったと想定される。すなわち、プリスカとアクィラと同じく、エパイネトスもまたエフェソとの強い結

びつきを持つ人物であると言える。彼ら三人がそのままエフェソに在住し続けていたとすれば、16 章の宛て先はエフェソであったことになる⁴³⁾。

このことは、彼らがエフェソに滞在し続けていたという想定に基づいており、すなわち、当時の世界に生きる人々の移動がある程度、制限されていたことが前提となる。それに対して、当時の地中海世界においては、人とももの移動に関してより大きな可能性があったことが広く指摘されている。P. Lampe は、ローマ帝国内における高い移動可能性を明らかにしており⁴⁴⁾、それはまた、新約聖書、とくに使徒行伝においても証言されている（パウロ、ペテロ、バルナバ、アポロなど。使 2:5-11; 6:9 も参照）。フォイベもまた、移動を経験した、もしくはこれから移動しようとしている人物である（ロマ 16:1-2）。帝国内における移動の可能性については、移動にかかる費用の安さの点においても根拠づけられている⁴⁵⁾。帝国内における一般的な移動可能性の高さは、16:3-15 のリストにあらわれるパウロの知己が東方から移住した可能性を補強するものであろう。

プリスカとアクィラに関しては、より高い移動の可能性を指摘することが可能である。使徒行伝にはアクィラがポントゥスの出身であることが記されており（18:2）、それゆえ彼は少なくともポントゥスからローマ、そしてコリント、エフェソへとという移動を経験している。プリスカがどの時点でアクィラと行動をともにするようになったかは不明である（ポントゥスかローマ、もしくはその間で）。しかし、彼女もまた、少なくともローマからコリント、エフェソという移動を経験している。そのような経験を持つ彼らが、もう一度ローマへと向かったと想定することは決して困難ではない。彼らはクラウディウス帝の追放令という外的要因によってローマを離れており、その解除にともなってローマへと帰還したのかもしれない⁴⁶⁾。追放令は、クラウディウス帝の死去によって失効されており、そのタイミング（54 年）は第 1 コリント書とローマ書の間に位置している。また、エパイネトスは、プリスカとアクィラの「家の教会」に属しており（ロマ 16:5）、彼らとともにエフェソから移住したのかもしれない⁴⁷⁾。

ここで示された個々人の居住地および移動に関する議論は、残念ながら

ローマ書 16 章の宛て先を同定するものではない。プリスカとアクィラ、エパイネトスの三人に代表されるような、16:3-15 に名前の挙げられているかつて東方にいた人々は、そのまま東方にとどまることも、あるいはローマやほかの地域に移住することも可能である。その問いに対する答えを、われわれの手にする資料は提示しない。彼らの歴史のほとんどをわれわれが知ることはない。

(3) 「警告」

ローマ書 16 章は内容上、ローマよりもエフェソにより当てはまるという主張の検討の最後に取り上げるのが、17-20 節の「警告」部分に関するものである。

ローマ書 16 章には、受け取り人側のリストと挨拶 (3-16 節) および差し出し人側のリストと挨拶 (21-23 節) の間に、敵対者への「警告」(17-20 節) があらわれる。この箇所は、16 章単体およびローマ書本体と比べて、趣がまったく異なっている。エフェソ仮説は、この「警告」と使徒行伝 20:17-35 のエフェソの長老たちに向けられた「ミレトス説教」との類似を主張する⁴⁸⁾。

たしかに、ローマ書 16:17-20 の「警告」は、ローマ書本体に通底する、未知の共同体との関係性を模索する融和的なムードとは大きく異なっており、その内容も多くの矛盾を呈する。その一方で、この箇所はパウロによる手紙全体と比べて、語彙と表現の点でも多くの不一致を見せる⁴⁹⁾。この「警告」は明らかに特定の敵対者の存在を前提とするが⁵⁰⁾、パウロによる手紙に基づいてそれを同定することは困難である⁵¹⁾。

さらに、ローマ書 16:17-20 の「警告」と使徒行伝 20:17-35 の「ミレトス説教」は、内容上の並行関係を示すものの、昨今の使徒行伝の(とくに演説部分における) 歴史的資料としての使用への厳しい制限に鑑みて、「ミレトス説教」をこの箇所の敵対者の同定のための資料として用いることは避けられるべきである。R. Jewett と W-H. Ollrog はむしろ、この「警告」と、牧会書簡群およびイグナティウスの諸書簡にあらわれる対異端言説との類似

を指摘し、上述の点とあわせて、ローマ書 16:17-20 が一世紀末以降の挿入であると主張する⁵²⁾。しかしながら、この見解は本文批評上の証言を得られてはいない。

以上の点から、ローマ書 16:17-20 の「警告」は、ローマよりもエフェソの状況により当てはまるという主張はしりぞけられる。この箇所背後にある状況および敵対者を同定することは困難であり、この論点においてもまた、宛て先問題に関しては開かれたままである。

ここまで、ローマ書 16 章の内容はローマよりもエフェソに当てはまるという主張について検証を加えてきた。その結果として、16 章の内容からその宛て先を同定することは非常に困難であり、それがローマなのか、エフェソなのか、それともまったく別のどこかなのか、という問いに対する答えは、オープンなまま残される。

まとめ

本論文は、ローマ書 16 章の宛て先問題について、とくにそれにおける「エフェソ仮説」に関する諸議論を扱った。それにより、形式的な問いについては、1-16 章が本来的にひとまとまりであること、そして内容的な問いについては、そこから宛て先を同定することは困難であるという答えをそれぞれ得ることができた。

内容的な議論が宛て先問題に対して何らかの解答を提示することがないのであれば、その答えは形式的な議論から導かれた結論に基づいて導き出されてしかるべきである。すなわち、ローマ書 16 章はそのはじめから、ローマへと宛てられた 1-15 章と結びつけられている。それゆえに、16 章もまた、ローマへと宛てられていると判断すべきなのである。

ローマ書 16 章が 1-15 章と結びつけられているのであれば、ローマ書は特定の人々、すなわち 16 章のリストに名前のある人々とその共同体へと宛てられた、より具体的な性格を持つ手紙である⁵³⁾。したがって、ローマ書

に、神学論文的でないパウロにとっての予行演習的性格⁵⁴⁾を認めたとしても、それらは徹頭徹尾、具体的な受け取り手を持つパウロの言葉として、理解されるべきであろう。ローマ書を彩るさまざまな議論は、まず第一に彼らに向けられたものなのであるから。

Bornkamm はかつて、ローマ書 16 章のリストにあらわれる人々がローマにいと想定することを「空想」と言った⁵⁵⁾。そうであるならば、本来的にひとまとまりとみなされるテキストを無理やり分割し、それぞれが別の場所に宛てられたと想定することも、方法論上は、等しく「空想」である⁵⁶⁾。同じ「空想」であるならば、プリスカやアクィラといった人々がどのような道筋を通してローマにたどり着いたのか、それについて思いをめぐらすことの方が、より有益であるように思われる⁵⁷⁾。

注

- 1) ローマ書 16 章の宛て先が問題となるのは、本論文で取り上げるような諸問題に起因するが、それがことさら研究者たちの関心を引きつけるのは、それが新約聖書中に類を見ない大きさの人名リストを保持しているからにほかならない。そのリストは、「特定の」共同体に属するメンバーのリストであり、われわれが最初期のキリスト教共同体について論じる際の非常に有益な歴史的・社会的資料を提供している。それゆえ、そのリストがどの地の共同体を指し示しているかを同定することは、最初期のキリスト教共同体研究において大きな意味を持つものである。たとえば、P. Lampe, *From Paul to Valentinus: Christians at Rome in the First Two Centuries*, trans. M. Steinhauser, London, 2003, pp. 164-183 は、その宛て先をローマと同定した上で、同時代史料の量的判断に基づく人名学的見地を人名リストの研究に導入し、一定の成果をあげている。
- 2) この広く認められた見解は、NA28 版の本文確定にも反映されている。
- 3) J. S. Semler, *Paraphrasis Epistolae ad Romanos cum notis*, 1769, pp. 277-311; D. Schluz, “Recensionen zu Eichhorn, Einleitung in das Neue Testament, und De Wette, Lehrbuch der historisch-kritischen Einleitung in die kanonischen Bücher des Neuen Testaments,” *TSK* 2, 1829, pp. 563-636, ここでは pp. 609-612. 両者の見解については、J. A. Fitzmeyer, *Romans: A New Translation with Introduction and Commentary* (AB 33), New York, 1993, p. 57 を参照のこと。
- 4) T. W. Manson, “St. Paul’s Letter to the Romans and Others,” in *The Romans Debate*, ed. K. P. Donfried, Grand Rapids, 1991, pp. 3-15, ここでは p. 13.
- 5) エフェソ仮説を支持したおもな研究者の一覧は、Fitzmeyer, *op. cit.*, p. 57 を参照のこと。
- 6) G. Theißen and P. v. Gemünden, *Der Römerbrief: Rechenschaft eines Reformators*, Göttingen, 2016, p. 89; 山田耕太「論評 青野太潮『パウロ——十字架の使徒』」『新約学研究』46号、2018年、69-73頁、ここでは70-71頁。
- 7) たとえば、Theißen and Gemünden, *op. cit.*, pp. 89, 106-109; 青野太潮『パウロ——十字架の使徒』岩波書店、2016年、56-58、98-99頁。また、同『最初期キリスト教思想の軌跡——イエス・パウロ・その後』新教出版社、2013年、594-595頁注6は、その見解がTheißenに依拠するものであることを明らかにしている。
- 8) エフェソ仮説についてはおもに、E. J. Goodspeed, “Phoebe’s Letter of Introduction,” *HTR* 44(1), 1951, pp. 55-57; Manson, *op. cit.*, pp. 3-15 を参照。議論の主要な論点については、K. P. Donfried, “A Short Note on Romans 16,” in *The Romans Debate*, 1991, pp. 44-52; Fitzmeyer, *op. cit.*, pp. 57-58; Lampe, *Paul*, pp. 153-164; U. Schnelle, *Einleitung in das Neue Testament*, 5th ed., Göttingen, 2005, pp. 138-141; U. ヴィルケンス『ローマ人への手紙』1 (EKK 新約聖書註解)、岩本修一訳、教文館、1984年、24-30頁; 原口尚彰「ローマ書の統一性についての文献学的考察」『人文学と神学』7号、2014年、17-32頁; 同『ローマの信徒への手紙』上巻、新教出版社、

- 2016年、19-31頁。そのほか、各注解書の序論および当該箇所を参照のこと。
- 9) S. Mathew, *Women in the Greetings of Romans 16.1-16: A Study of Mutuality and Women's Ministry in the Letter to the Romans*, London, 2013, p. 3 も、エフェソ仮説に関する論点をこのように、ふたつに分類する。
 - 10) 本文批評上の議論についてはおもに、K. Aland, *Neutestamentliche Entwürfe*, München, 1979, pp. 284-301; P. Lampe, "Zur Textgeschichte des Römerbriefes," *NovTest* 27, 1985, pp. 272-277 を参照。彼らは各異説の発展過程を再構成し、それを通して本文確定を行っている。H. Gamble, *The Textual History of the Letter to the Romans*, Grand Rapids, 1977 による詳細な研究も参照のこと。
 - 11) Aland, *op. cit.*, pp. 287-290.
 - 12) 原口、前掲論文、18-19頁。
 - 13) R. Jewett, *Romans: A Commentary* (Hermeneia), Minneapolis, 2007, p. 4. 川島貞雄「新約正典成立史」『総説新約聖書』荒井献ほか、日本基督教団出版局、1981年、471-501頁、ここでは482頁によれば、マルキオンは旧約聖書の神と新約聖書の「善なる神」を区別し、旧約聖書を排除するとともに、反ユダヤ的な視点から新約聖書の編集作業を行った。ここでは、マルキオンに不都合な点として、ユダヤ人に対する肯定的評価(15:7-13)や、エルサレム訪問の計画(15:25-29)が考えられる。
 - 14) Manson, *op. cit.*, p. 13. それに対して、ローマ書本体(1-15章)にも分割仮説を主張するのが、W. Schmithals, *Der Römerbrief: Ein Kommentar*, Gütersloh, 1988, pp. 25-29; 木下順二『新解 ローマ人への手紙』聖文舎、1983年、13-168頁; 同『パウロ——回心の伝道者』筑摩書房、1986年、187-200頁。両者ともに、1-16章は三つの手紙の集合体であり、16章はエフェソに宛てられた独立した手紙であるとみなす。そのため、本論文では両者ともエフェソ仮説の範疇にあると判断し、彼らの分割仮説を個別に取り上げることはしない。彼らの仮説に対する批判は、原口、前掲論文、25-28頁を参照のこと。
 - 15) Aland, *op. cit.*, p. 297; Lampe, "Text," pp. 272-277 は、14章と15章の切断はマルキオン系の編集によって行われたものとし、それゆえ14章と15章が切断されたものをマルキオン型の写本の影響下にあるとみなす。
 - 16) Manson, *op. cit.*, p. 10 は、Schluz の想定の時点では証拠を持たない仮説に過ぎなかったものが、 \mathfrak{P}^{46} 写本の発見によって証明されたと評価する。
 - 17) Manson, *op. cit.*, pp. 10-12.
 - 18) Aland, *op. cit.*, pp. 295-297. Lampe, *Paul*, p. 155 もそれに同意する。それに対して、原口、前掲論文、20-21頁は、 \mathfrak{P}^{46} 写本を二次的な本文の反映であるとはみなすものの、 \mathfrak{P}^{46} 写本を現存しない1-15:33+16:25-27の形とアレクサンドリア型の混合とみなしている。この想定もまた、Manson に対する Aland の方法論的指摘を避けることはできないであろう。
 - 19) Aland, *op. cit.*, pp. 284-301. Lampe, "Text," pp. 272-277 は、この形が現存する写本による証言を得られないために、16:24 もまた本来のテキストに含まれていたと想定する。しかし、24節は上述の通り、本文批評上の外的証拠における判断により後代

の挿入であるとみなされる。

- 20) W. マルクスセン『新約聖書緒論——緒論の諸問題への手引』渡辺康磨訳、教文館、1984年、205-206頁。
- 21) Manson, *op. cit.*, p. 8; 青野太潮「ローマの信徒への手紙」『新版 総説新約聖書』大貫隆・山内眞監修、日本キリスト教団出版局、2003年、260-278頁、ここでは275頁。
- 22) むしろパウロの手紙は、「キリストの恵み」や「神の愛」への言及によって閉じられている（1 コリ 16:23; 2 コリ 13:13; ガラ 6:18; フィリ 4:23; 1 テサ 5:28）。
- 23) Lampe, *Paul*, p. 155; R. L. Longenecker, *The Epistle to the Romans: A Commentary on the Greek Text* (NIGTC), Grand Rapids, 2016, p. 1057.
- 24) Schnelle, *op. cit.*, p. 139.
- 25) エフェソ仮説を支持する G. ボルンカム『パウロ——その生涯と使信』佐竹明訳、新教出版社、1986年、383頁、およびマルクスセン、前掲書、207頁はそれぞれ、このふたつの仮説に対する判断をオープンなまま提示する。
- 26) たとえば、W. G. Kümmel, *Introduction to the New Testament*, trans. H. C. Kee, London, 1975, p. 317; 山田、前掲論文、70頁。
- 27) A. Deissmann, *Light from the Ancient East: The New Testament Illustrated by Recently Discovered Texts of the Graeco-Roman World*, trans. L. R. M. Strachan, Grand Rapids, 1978, pp. 234-235; J. I. H. McDonald, “Was Romans XVI a Separate Letter?,” *NTS* 16(4), 1970, pp. 369-372, ここでは p. 370. Deissmann が明確にエフェソ仮説を支持する一方で、McDonald ははっきりとエフェソ仮説への賛同を示していない。しかしながら、全体を通して Manson に好意的に言及している点に鑑みて、エフェソ仮説を支持しているとみなしてもよいであろう。
- 28) McDonald, *op. cit.*, p. 370.
- 29) 言及する人物への個人的なコメントの付記 (P.Oxy 1679)、個人の推薦を目的とする手紙 (P.Oxy 1162 など)、非血縁者への家族的呼称の使用 (P.Oxy 1300, 1962)。Deissmann, *op. cit.*, p. 235; McDonald, *op. cit.*, pp. 371-372.
- 30) Lampe, *Paul*, p. 153; Schnelle, *op. cit.*, pp. 140-141.
- 31) Fitzmeyer, *op. cit.*, p. 56. 青野が依拠する G. タイセン『新約聖書——歴史・文学・宗教』大貫隆訳、教文館、2003年、121-122頁もまた、ローマ書の巡回型書簡的な性格を想定する。ローマ書本体 (1-15章) の一般的な性格をより強調するのが、J. Knox and G. R. Cragg, “The Epistle to the Romans,” in *The Interpreter's Bible*, vol. 9, New York, 1954, pp. 355-668, ここでは pp. 363-368 である。Knox によれば、ローマ書は 1-15 章のみの形で各地に流布しており、16 章はもともとエフェソに宛てられた独立した手紙であった。それはエフェソにおいて保存され、後代になってパウロの手紙の収集作業がエフェソで行われた際に、1-15 章に付け加えられた。その際に、その手紙 (1-16 章) がローマ書と名づけられたのは、二世紀半ばに異端との争いに直面したローマ教会が、パウロとの結びつきを主張するためであったと Knox は想定する。

- 32) Manson, *op. cit.*, pp. 12-13.
- 33) ボルンカム、前掲書、384 頁。
- 34) 女性であろう。ユニア（男性であれば、ユニアス）の性別に関する議論は、L. Belleville, “Ιουνιαν ... ἐπίσημοι ἐν τοῖς ἀποστόλοις: A Re-examination of Romans 16.7 in Light of Primary Source Materials,” *NTS* 51, 2005, pp. 231-249; M. Burer and D. Wallace, “Was Junia Really an Apostle?: A Re-examination of Rom 16.7,” *NTS* 47, 2001, pp. 76-91 を参照のこと。
- 35) Lampe, *Paul*, pp. 167-168. Jewett, *op. cit.*, pp. 945-972 は、ここにマリヤ、トリュファイナ、トリュフォサを加える。プリスカとアクィラを除いて、彼らとパウロの出会いと交流は、われわれの知らない歴史である。
- 36) Lampe, *Paul*, pp. 164-165 は、彼ら二人がキリスト者であるならば、まず彼ら自身に挨拶が向けられたであろうとする。
- 37) W-H. Ollrog, “Die Abfassungsverhältnisse von Röm 16,,” in *Kirche: Festschrift für Günther Bornkamm zum 75. Geburtstag*, ed. D. Lührmann and G. Strecker, Tübingen, 1980, pp. 221-244, ここでは、pp. 235-242.
- 38) 「プリスカとアクィラの家にある教会」（5 節）、「アリストブロス（の家）のものたちからのものたち」（10 節）、「ナルキソス（の家）のものたちからのものたち」（11 節）、「アシンクリトス、フレゴン、ヘルメス、パトロバス、ヘルマス、そして彼らとともにある兄弟たち」（14 節）、「フィロロゴスとユリア、ネレウスとその姉妹、そしてオリュンパスと彼らとともにあるすべての聖なるものたち」（15 節）の五つ。
- 39) Ollrog, *op. cit.*, p. 240. とくに、パウロが自身の協働者として最大限の評価を与え、エフェソとも強い関係を持つアポロ（1 コリ 3:4-9; 使 18:24-27）への言及がないことは、強い違和感を与える。アポロは、この時点ではすでにエフェソを去っていたかもしれないが、少なくとも第 1 コリント書の時点ではまだエフェソに滞在していた（16:12）。
- 40) C. E. B. Cranfield, *A Critical and Exegetical Commentary on the Epistle to the Romans* (ICC), vol. 1, Edinburgh, 1975, p. 10; B. Witherington III, *Paul's Letter to the Romans: A Socio-Rhetorical Commentary*, Grand Rapids, 2004, p. 5. Theißen and Gemünden, *op. cit.*, p. 108 はエフェソ仮説を支持するものの、このリストを送ることによってパウロがまだ知らない人たちの助力を得ようとしていること自体については、賛同する。
- 41) コロサイもまた、パウロにとって未知の共同体として設定されている（コロ 1:4, 9; 2:1）。
- 42) アクィラは、ユダヤ人である（使 18:2）。
- 43) Goodspeed, *op. cit.*, pp. 55-56.
- 44) P. ランベ「地中海地域における初期キリスト教徒たちの超域的なネットワーク」山吉裕子訳、『聖書学論集』49 号、2018 年、105-125 頁、ここでは 114-115 頁。故郷から遠く離れた地に暮らす人々が、同じ出身地を持つもの同士で共同体を形成している例については、橘耕太「ユダヤ人共同体における『出身地』」、『聖書学論集』48 号、

- 2017 年、29-56 頁、ここでは 48-49、55-56 頁注 46 も参照のこと。
- 45) Lampe, *Paul*, pp. 193-195.
 - 46) プリスカとアクィラのローマへの帰還の理由としては、パウロが訪れるための前準備であるという伝道戦略上の想定もされている。 *Ibid.*, p. 158.
 - 47) 「アジアの初穂」という称号はむしろアジアの外でこそ有効となるという、Kümmel, *op. cit.*, p. 319 の指摘は、エパイネトスの移動の可能性を高める。
 - 48) Manson, *op. cit.*, p. 13.
 - 49) Jewett, *op. cit.*, pp. 986-988; Ollrog, *op. cit.*, pp. 230-234.
 - 50) Lampe, *Paul*, p. 160 に反対。
 - 51) Fitzmyer, *op. cit.*, p. 745; ヴィルケンス、前掲書、29 頁。Theißen and Gemünden, *op. cit.*, p. 108; 木下『新解』152-153 頁は、「自分の腹に仕える」人々への言及（ロマ 16:18）とフィリピ書 3:19 の「腹を神とする」人々への非難との関連を指摘する。この点がこの箇所への敵対者を明らかにするためには、さらなる検証が必要とされよう。
 - 52) Jewett, *op. cit.*, p. 988; Ollrog, *op. cit.*, p. 234. 原口、前掲論文、24 頁もこの見解に賛同する。
 - 53) エフェソ仮説の支持者たちが、ローマ書により一般的な性格を想定することについては、本論文注 31 を参照のこと。
 - 54) Theißen and Gemünden, *op. cit.*, pp. 99-124 によれば、ローマ書は、パウロがすでに送っていたほかの手紙における議論、および彼の伝道活動における経験がそこかしこに反映されており、同時にそれは、パウロがこれからの訪問を予定している地（エルサレム、ローマ、スペイン）に対する、いわば予行演習としてのテキストでもあった。
 - 55) ボルンカム、前掲書、383-384 頁。
 - 56) エフェソ仮説のもろもろの欠点を、おしなべてフォイベの口頭説明によって埋めようとすることもまた、同様である。
 - 57) 本論で取り上げることのなかったローマ書 16 章の内容的な問題のひとつに、ἀπίασαθε（「あなた方は（誰それに）挨拶せよ」）の使用法、およびその機能に関する議論がある。この語は、3-16 節において、計 16 度繰り返される。P. Arzt-Grabner, *Philemon* (Papyrologische Kommentare zum Neuen Testament 1), Göttingen, 2003, pp. 264-267; T. Y. Mullins, “Greeting as a New Testament Form,” *JBL* 87(4), 1968, pp. 418-426 によれば、古代地中海世界の書簡資料における ἀπιάζομαι の使用は、一人称、二人称、三人称ともに広く確認することができる。その際、一人称は直接法で (P.Col 8.215; P.Haun 2.30; P.Oxy 1677, 1767 など)、二人称は命令形で (P.Oslo 2.48; P.Oxy 295, 1489, 1676; SB 6.9017 [ἀπίασαθε] など)、三人称は直接法で (BGU 2.530; P.Fouad 75; P.Mich 3.201; P.Oxy 114, 530 など)、使用される。しかしながら、16 章におけるその使用は、その連続性およびそれに付記されている人名の多さの双方の点で、ほかに類を見ないものである。また、二人称（命令形）での使用の場合、通常は命令の主体、命令の受け手（挨拶の主体）、挨拶の対象が別々の人物となるの

に対して、16章では、手紙の宛て先がローマであれエフェソであれ、命令の受け手（挨拶の主体）と挨拶の対象が同じ人々を指しているように見える。この点に関して、Gamble, *op. cit.*, p. 93 は、ここでの二人称は一人称として機能する、すなわち挨拶の主体はパウロであると主張する。それに対して、Mathew, *op. cit.*, p. 93 は、挨拶の主体と対象をいく度も入れ替えることによって、ここで名前の挙げられているすべての人々が互いに挨拶を送るようにパウロは求めている、と想定する。

(本学大学院キリスト教学研究科キリスト教学専攻博士課程後期課程)